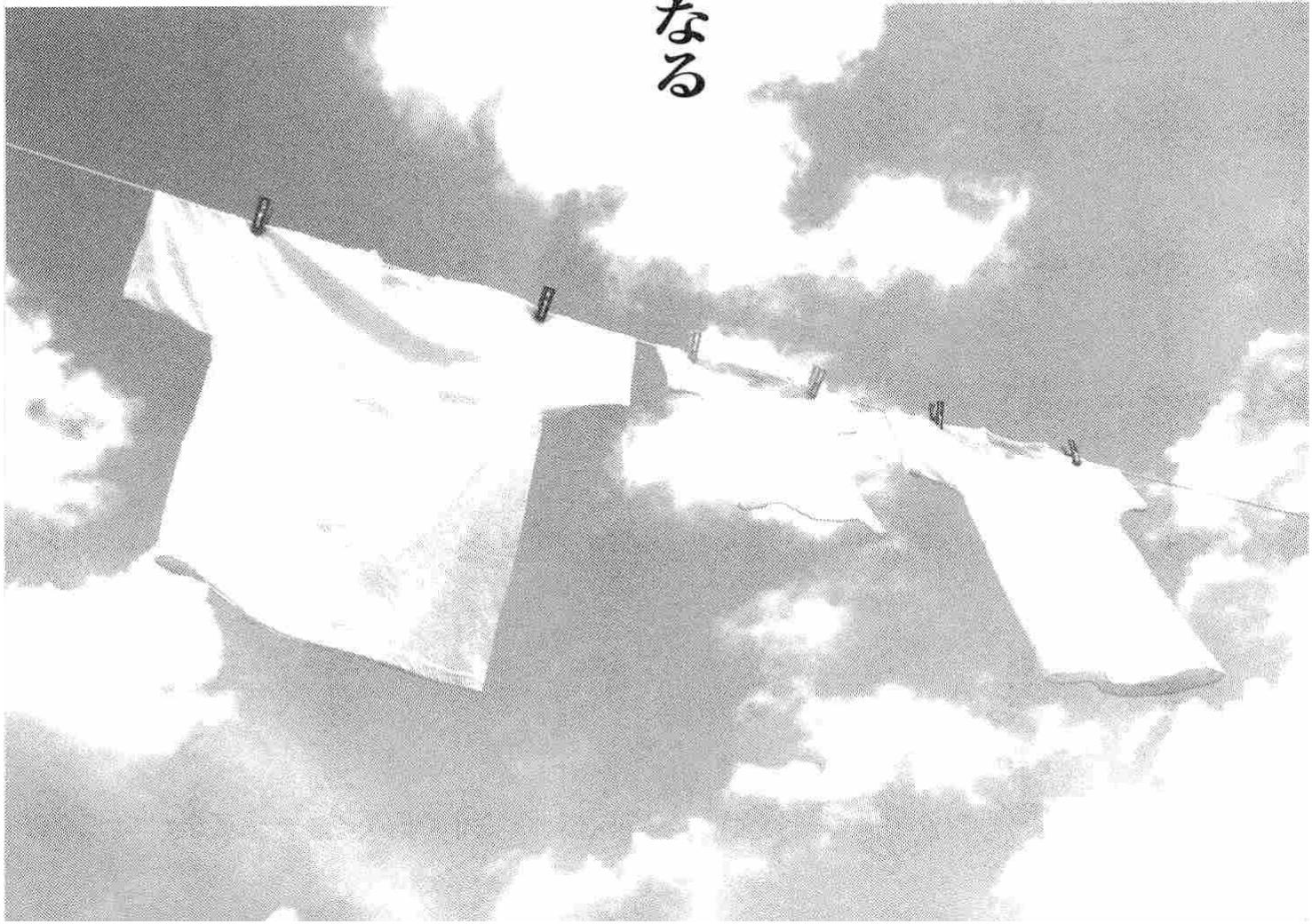


1章

背筋を。ピンと伸ばした親になる



1 子供のためにやつているのだから？

◆何気ないひと言から

「最近、自転車と接触して起ころる自動車事故が多いような気がするんですがね」

信号無視で飛び出してきた自転車をよけたあと、タクシーの運転手はほつとした声で言う。

つい先日、私の学園がある吉祥寺中道商店街でも車と人の接触事故があつた。どういう理由であれ、誰も事故を起こしたいとは思わないし、事故にあいたいとも思わない。でも、実際自分が歩いていても、自転車をこいでいても、車を運転していても、周囲への注意が散漫になり、自分のことしか考えていない一瞬いつしゆんがある。

「どんな理由であれ、車と自転車、車と歩行者との事故は、全部車を運転していた者が責任を取らされますからね」と運転手は言う。

「それに夜、ランプを点けずに走っている自転車にはまいつてしましますよ。彼らは自転

車のランプは夜道を照らすためだけでなく、自分の存在を知らしめ、事故を防止するためであることに気が付かないんですかね？」

さすが、プロの運転手さん。運転手さんの何気ないひと言で、目から鱗だ。運転手さんの話を聞きながら、自分も含めて人間、何て愚かなのだろうかと考えてしまつた。

世の中、見方を変えたら絶対違つたものが見えてくる。そもそもちょっと見方を変えればいいだけなのだが、それがなかなかできない。凡人の悲しさだ。

◆相手のため、自分のため

昔と違い、街路灯が発達し、暗い道が少なくなった。ノーライトで走つても自分はさほど困らない。しかし、反対から走つてくる人にとってはどうなのかと考えてみると、ライトをつけて自分の位置を知らせれば、相手は安心して走つて来られる。そういう考え方がすばっと抜け落ちていることに気付く。

相手のためになり、結果自分のためになる。こんな素敵なことはないのだが、そう考えられる人間は少ない。むしろ、ライトを点けると自転車をこぐのが重くなり、スピードが出せないからノーライトで走る。自分にとつてのその場の「楽」を優先させるために、相手を困らせ、結果自分の命の危険にも繋がってしまう。

このように自己の都合で知らず知らず他人に迷惑をかけることは多いが、最も気付くにくく害があるのは、「相手のため」という大義名分たいぎめいぶんを掲げながら、それが自分のためにしかならないケースだ。

先日NHKで『学校に行かれない先生達』というテーマの番組を放送していた。私はこの手の番組はなるべく見ないようにしている。なぜかとすると、先生方があまりに一生懸命なことが分かり、せつなくなるからだ。その時もちょっと見て、なんとも悲しい気持ちになってしまった。親も先生も一生懸命子供のためという大義名分のもと、子供に大迷惑をかけているように思えるからだ。

◆子育てが生みだす支配、依存関係？

親は子供のためを思つてと言い、先生は生徒のためにやつたのにと言い、生徒は友達のためだつたと言う。

「相手のために」とは結局何だろう。結果本当に相手のためになつていたか。「相手のために」が弁解に、自己弁護になつてはいらないだろうか。本当に相手の気持ちを思うなら、その場に応じて放つておくのも思いやりであり、何もしてあげないことも思いやりであるという事実に気付いて欲しい。そして、自分のやつ正在做的事情が「意外と自己満足の世界

かも知れない」ということにも。

では、自己満足の世界はいけないのか、というと、そうではない。自己満足は満足の原点。どんなことをしても見方を変えれば、基本は自己満足から始まっている。だから切手収集のような、影響が自分の範囲にしか及ばないときは、それでいい。

しかし、他人を巻き込むときは、ちょっと立ち止まって考えなければいけないと思う。きっとそれが思いやりなのだろう。

子供が「学校に行かない」と言い、親を困らせようとしている場合、親はどんな対応をすればいいだろう。結局、学校に行くか行かないかは、自分の人生に関わってくる問題だ。相手のために（親のため、先生のために）学校に行くのではない。自分が必要と思うから行くのだろう。親を説得し、学校を辞めて、自分の進みたい方向でしつかり^{たくま}逞しく生きていけるようにするくらいの気概が子供にあれば親はむしろ喜んでいい。高校を中退し単身渡米し、マイナーリーグからメジャーリーグに這い上がったマック鈴木のような若者もいる。

だから、「お願ひ、ママのために学校に行つてね！」などとお願いまでしてしまっては愚く^{こっちょく}の骨頂だ。学校とは、お願いされて行くところでも、お願いして行かせるところでもない。親は子供が学校に行かないと言つても、本当は困る必要はないのだ。

なぜ親は子供が学校に行ないと困るのだろう。おそらく自分の子供を他の子供達と同

じようにしたがる気持ちからではないだろうか。同じにしようとするあまり、隣の子供のサイズの合わない、似合わない服を我が子に着せこもうと躍起^{やっき}になる。

髪をふりみだして躍起になつている姿を、美しいと思う人はいない。子供もそんな親のようになりたいとは思わない。村上龍さんの行つたアンケートで、多くの中学生は「親を尊敬するが、親のようには生きたくない」と答えたそうだ。この結果がすべてを物語つている。

親は子供のため、という大義名分で、自分が上手に時間を作れること、自分の人生の建て直しをしなければならないこと等を先延ばしにしない方がいい。それが結果としてどうだけ子供の自立を妨げ^{さまた}してしまうことか。

親が子供のケアという大義名分を通じて、知らず知らず子供を支配してしまう。「子供のためにやつている」という意識が強すぎて、親が自立できない。そうやつて育てられた子供は自立する力を奪^{うば}わってしまう。

引きこもりの息子をもつ家族の関係を描いた、村上龍さんの『最後の家族』では、親と子がともに依存^{いぞん}してしまった関係の弊害^{へいがい}が指摘されていた。あとがきには「誰かを救うことでも自分も救われる」というような常識がこの社会に蔓延^{まんえん}しているが、その弊害は大きい。そういうふた考え方自立を阻害^{そがい}する場合がある」と。

◆親自身の生き方をしつかりみせる

もし親として時間がなければ、時間をつくることを楽しんだらいい。自宅から出て何かをする。それが不可能なら、自宅でできることを考え、それを楽しんだらいい。

その方が、どれだけ子供達は納得することか、救われることか。どれだけ、子供達の自立の励みになることか。思い通りにならないことの方がが多い世の中なのだから、その規制された中でどのように自由を楽しむのか、親が自分の生き方を通してしつかり見せたいのではないか。

自身の生き方に対する無意識下の不満の捌け口に子供を利用していないか省みて欲しい。「子供のためにやっているんです！」と言われても、自分のできない夢を押し付けられた子供にとつては、たまつたものではないから。

世の中、自分のためと思つてしていることが意外と人のためであつたり、人のためと思つてしていることが本当は自分のためであつたりする。それだけに、少し立ち止まって、「これは自分のためにしているのかな？ それとも人のためにしているのかな？」そして結果与える影響は？」と考えてみることも必要だ。

時には立ち止まって、ほんの少し見方を変えて率直に自分を振り返ってみませんか。子供達のためと信じてやっていることが、案外、自己満足に陥つていなか。

2 子育ての基準を持とう

◆子育てが困難な時代

最近、全国各地からフリースクールの先生やフリースクールを経営したいという方が訪ねて来てくれる。その方々から伺つてみると、全国各地のフリースクールにはいろんな特色がある。行政側のフリースクールへの対応も都道府県により、相当異なつており驚かされる。そんな中、共通して困つているのではないかと思える現象があつた。

それは子供同士、本音^{ほんね}で話をする訓練ができておらす、表面的な付き合いだけが上手なことだ。そしてそれが徒^{あだ}となり、最終的に人間関係の躊躇^{つまづ}につながつている。

親も様々な子育てのプレッシャーを受けているように見える。「児童虐待防止法」という法律ができるが、これは親が子供をしつけることと、虐待することの違いが見えなくなつてきている証拠だろうか。

かわいいから厳しく叱る、本当に大切な子供だから厳しく注意する、という当たり前の

ことが揺らぎはじめている。そして現代の親達は子育てに対し、時に困難を感じ、自信をなくしけれ、不安になつてゐるようと思える。世間の非難は親に集中しがちだが、結局、親ばかりを責めても解決にはならない。

◆「自分の派^は」が立てられる人間

学園にも様々な親御さんからの問い合わせがある。まず聞かれるのはこの学園の位置づけだが、社会的な地位や肩書きを求める人に満足のいく答えが与えられるかは疑問だ。というのもここは学校法人ではないし、かといって、「塾」かといわれると「塾」でもない。

あえて分類すれば、フリースクールに入るだろう。しかし、フリースクールといつても、大学検定試験や通信高校のサポート主体のところもあるし、場所だけを提供するフリースペース的などころもある。ひとくちにフリースクールと言つても千差万別^{せんさばんべつ}だ。

実はこの学園はそういうたایプのどこにも属^{そく}さないと思つてゐるので、世間の定規^{じょうぎ}で説明するのは難しい。ただ高校のように時間割がはつきりしており、授業内容は大学と専門学校の中間で、九〇%以上の先生が自分の職業を持つていて、基礎学力を重視している。

そして学生には、多様な生き方の選択をする自由はあるが、選択したことについての責任と義務も生ずると明確に説明している。

現在、中学生、高校生、大学生でも社会人でも、学園で勉強する受け入れ体制を整えている。知識や技能は、必要とする者に広く開放したい。先生方にはそれぞれ専門の分野で裏付けされた実績があるから、知りたい者には惜しまず提供する。

そこで年齢や知識に関係なく、知りたいことや気付かなかつたことに目が開かれていく子供達がいる。しかし「勉強したい」と子供が興味を持つても、親御さんの方で「学園で勉強するのは、うちの子には無理ですよね」と言つて止めさせるケースもある。親としては資格が取れることに不安を感じてしまうと言ふ。

私の学園がどうこうではなく、何かやることに興味を持ち始めている子供の変化に気付いてあげて欲しい。子供のやる気を削がないで、と言いたい。

「うちの子に、そんなの無理ですよね」と言う前に、親の知らない子供の可能性を信じなくてはならない。親は子供の可能性を完全に自分の定規^{じょうき}で測れる気になつてはいけない。無理だと考へているのは、「あなた」であつて、子供ではないことに気付いて欲しい。

昔の人は、「子供は授^{さず}かり者。天からお預^{あず}かりした子供達、立派に育てて世の中にお返しすることが親の義務」と言つていた。この立派という言葉の意味は、「派が立てられる」という意味ではないだろうか。それは特別有名になることでも、社会的な地位を得ることでもないと思う。自分で自分らしく、この世の中に「自分の流派」が立てられる人間になれ、

ということだと思う。

つまり、模試の偏差値や学校の成績といった狭い学力観ではなく、自分の意見をしつかり持てるような自分の「派が立つ」子供に育っているかどうか、という基準で子供の成長を測つてみてはどうだろうか。時には、子供と向き合つて改めて「対話」をすることだ。

自分に意見があれば、人としつかりディスカッションができ、そこから学ぶこと、発展することがたくさんある。それが社会でしつかり骨太に生き抜いていく力になる。

◆「遊び」ができない子供

先日、三四年ぶりに友人に会った。彼女は小学校二年生の担任だという。その彼女が子供達が「遊び」ができないことが教育の現場で今一番問題になつていると話してくれた。子供達がどうやつて他の人と一緒に遊んだらいいか分からぬ。そのために、低学年の先生方は「遊び方」を教えていると。

子供にとつて、遊びは大切な「学びの場」だ。遊びながら、「こんなことをすると嫌われるのだな」「どうして上手く負かせられなかつたのかな」「この友達を説得するのには、こうしないと駄目なのだな」などと、あの小さな可愛い頭で疑問を持ち、情報を集め、答えを出そうとする。「相手に納得のいくように自分の気持ちを伝える」という、人間社会で生

活する方法も体得していく。その遊びができないということは、「学ぶ」ことができなくても仕方がない。

教師も親も「机」という場所で時間を費やすことを「学ぶ」ことだと勘違いしていないだろうか。そして、ただただ「机に向かって勉強しなさい！」に終始する。机に向かうという習慣は悪くはないが、それ以前に学ぶ心ができていない子供が疑問を持つことはない。疑問を持つことのない子供が、解決する楽しみや、答えを見つけ出す楽しみが持てないのは当たり前。そんな子供が、ただ親の言う通りに勉強をしても、それは単に強く勉めただけで、興味があつて学んだのではない。だから飽きるし、つまらないので勉強が嫌いになつてしまふ。そんなトラウマをつくるないようにしたい。

◆その年齢の子供が一番似合う世界に

人間が成長する上で、絶対できないことがある。それは、一年一年としか歳を重ねられないということだ。飛び級ならぬ飛び歳はどんなに優れた人にも不可能だ。私達大人は、子供が一歳、二歳と歳を重ねていくとき、その歳にあつた対応をしていくべきではないだろうか。五歳という年齢は子供の生涯で一回しかない。無理に大人扱いすることはない。五歳としてのその子供を尊敬し、受け入れ、対応るべきではないのか。子供を取り巻く

大人達にそういう考えがあれば、子供は子供の世界の学びの場で、遊びの中から、人間として生きる基礎を学んでいくのではないか。

遊びができない子供というと、「テレビのある生活が悪い！」とか、「ゲームが子供に悪影響を与えていた」と責めたくなる。しかし、何かを悪者にして解決する問題ではない。

自分にとつて不必要な物や、悪い物、悪い人間は世の中にも多い。その中でも逞しく骨太に生きていかなければならぬ。だからこそ、テレビが悪い、ゲームが悪いと言う前に、自分にとつて悪いものを「選択しない力」を子供につけさせるようにしよう。

そのために、まず親自身が自分の価値観をしつかり持つ。たとえ子供に「他のうちでは皆やっているよ！」と抗議されても、「こういう理由で、うちではやりません！」という、しつかりした根拠^{こんきょ}を。

三四年振りに会った友人の話を聞きながら、つくづく私達大人は、理屈で考える教育ではなく、その年齢の子供が一番似合う世界にいることを大切にしてあげる教育をしたいと思つた。将来のためとはいへ、夜遅く小さい子供が眠そうな目をして塾の鞄^{かばん}を背負つてバスに乗つている図より、可愛い顔をして安心しきつてベットで寝ている図の方が、ずっと似合うと思うときは、その思う心を優先しよう。そんなふうに子供がゆつたり育つように、大人達は子供を本当の意味で大切に大切に育てていきたいものだ。

3 我が家の家訓作り

◆我が家の基準でずっと生きてきた

時代が変わり、「個人主義を大切にする」「便利な生活をする」などという美名のもとに、親から子へと伝えるものが減り、なくなってきた気がする。親から子へ伝えるものがなくなるということは、誰に育てられてもいい（育てられなくてもいい?）ということだ。洗濯や食事の世話だけならロボットにしてもらえば、と思えるほどに、現在の親子関係は無味乾燥になつているように思える。

しかし、実際には、親から子に伝えられた生活の仕方、生活の知恵等が、何かしら本人の自己形成に影響を及ぼしているはずだ。それと思うと、現代ほど「我が家のかくんの家訓」作りが必要な時代はないのではないか。

私は現在、九四歳と八九歳の両親と生活している。現在までの生活基準はやはり、『上田

家の家訓』を元にしてきている。

そう、我が家家の家訓どおりに生きてきた。

親子兄弟仲良く。友達とは、困っているとき側に居て助けてあげ、友達が幸せで華やかなときは、別に遠くに居てもいい。悪いことでお金を儲けるのはいけないが、仕事には貴賤はない。どんな仕事でお金を儲けてもいい。でも、そのお金をどのように遣うかで、人間としての価値が決まる。親がどんなに偉い人でも、それと子供とは関係ない。子供が努力して親が偉くなつたのではない。その子供は単に偉い人の子供でしかない、等々。

我が家家の家訓は、家訓と言ひがたいほど当たり前のことばかりだつた。だが、しつかり叩き込まれたように思う。また、実際親達はそれを実践した。

今でも思い出すのは、兄が結婚するとき母からこんこんと諭された言葉だ。

「上田の家は親子、兄弟仲良くを一番大切にしてきた家です。私も上田のお婆様から大切にされてきました。あなたも大切に育てられたお嬢さんをいただくのだから、大切にしなければ」

そして、初めて挨拶に来た姉に向かって、「秀子さん、いつまでも若若しく綺麗でいなさいね」と言つて、「恥ずかしいから止めて!」という私達の意見を無視し、母はおもむろにズボンに履き替え、これをすれば若くいられる信じて体操をその場で実践してみせ

た。

実際母は姉達を一度も「義理の娘」とか「嫁」という言葉で呼んだことがない。いつも「我が家家の長女が、次女が」と呼び、気がついたら私は三女になり、何を買つてもらうのも三番目になつていた。

◆我が家版民主主義

我が家家の家訓といえば、皆で納得して決めるという家庭版、民主主義の決まりがあつた。小さいときの我が家は本当に貧しかつたのだが、日本中が貧しかつたせいか、我が家が貧しいとは長い間、兄弟の誰もが気付かなかつた。また、両親もまつたくそれを感じさせないよう育ててくれた。いや、むしろ貧しいことを楽しませてくれた。

ここからは大人の話、ここからは子供の話と、厳しく境界線は引かれていたが、しかし小さいときの我が家は、本当に「民主主義」だった。

給料日に父が差し出した給料袋を、「おつかれさまでした。ありがとうございます」と言いながら母が押しただいた後、何か買わなければいけない物があると、たとえそれがコンロであつても、全員でどんなのを買おうかと話し合つたり、お店にコンロを見に行つた

り、パンフレットを集めたりして検討した。そして、どのコンロを買うのかが決まるとき、母が「それでは皆で耐乏生活をしましよう！」と言つて、コンロを買うお金が貯まるまで、贅沢はしないように我慢した。

またあるときは、「お父様は要らないっておっしゃるけど、お父様の背広が古くなつたので、お父様に新しい背広を買っていただきましよう」と言う母の言葉でまた、どんな背広が父に一番似合うか家族中で話し合い、お店に見に出かけた。そして買う背広が決まると、母が「皆で耐乏生活しましょう！」と号令をかけ、私達は欲しい物があつても我慢するようになっていた。

我が家買物のあらゆるもののが、こうやつて我が家にやつて來た。

後年父の写真を見ながら、こんな野暮つたい背広を買うために皆で耐乏生活をしたんだと思ったが、母の説明で、あの時にできる最高の値段の買物だつたことを知つた。子供だった頃は理解できなかつた親達のいろんな苦労がよく理解できるようになり、「大変だつたろうな」と感謝した。

コンロや背広等、耐乏生活をして買った物を家に持ち帰り、皆で箱を開けて見たときのことや、皆でファッションショーのように着て見せ合つたときのうれしかつたことは、今でも思い出すことができる。

父は昨日、入れ歯をどこかに置き忘れたと、家中を捜しまわっていた。食べることがメイン・ジョブになつてゐる今の父にとつては大事件だつたようで、とても悲しそうな顔をしていた。

社会的に高い地位に就くことが成功というのであれば、父は社会的には決して成功した人ではないかもしない。八四歳で人生最後の仕事を終えたが、それは、朝六時から午後三時まで、武藏野市の自転車整備をする整備員の仕事であつた。しかし、満州から引き揚げてきて、子供を食べさせるためにガードマンとして就職しているときも、整備員として働いているときも、父の^{おだ}穩やかさに^{なぐさ}慰められたと言つて、わざわざお礼を言いに来て下さつた方が何人もいた。

社会的に成功できるかできないかは、努力だけでは解決できない大きなものがあると思うが、父はいつも穏やかに自分の道を^{しんし}真摯に歩いていた。そんな父を見て、父以上に活躍している兄達が父を尊敬し、^{いづく}慈しんでいる。

人には人の歩みのテンポがあると思う。社会的に成功するかしないかは別にして、学園の生徒達には、自分のテンポでしつかり人生を歩んで欲しいと思う。そのために、自分には何が不足しているのか。何ができないのか。そのために、何を身につけたらいいのかを、しつかり理解できる人間になつて欲しいと思う。

◆変えるところと変えないところ

かねがね、「人」は「生き物（なまもの）」だから、この「人」が作っている家庭・学校・会社という集団は、同じことを教えるにも、同じことをやるのにも、その時々で、そこにいる人達に合わせよりよく必要な変化をさせていくべきだ。そして、与えられた環境や条件を嘆くのではなく、むしろそれを逆手にとつて、皆で楽しんだらいいと思う。

変わることを怠ると、永年の溜まり水で、水が濁り腐くさってしまうのと同じ現象が起ころうではないだろうか。その上、環境や条件不足を理由に嘆いていたら、まるで負け犬の遠吠とおほえのように聞こえる。だから、学園も足りない諸条件を楽しみ、一方で核になる変わらない部分、不易流行ふえきりゅうこうの部分を伝えながら、その時々の学生に合わせ改革するよう心がけている。流行りの言葉ではないが「時にはその改革が痛みともなを伴うものであつても」。

時代の雰囲気が変わつても、人間の深いところにある本質や価値までがまるつきり変わつてしまふわけではない。上澄うわすみに惑わされる必要はない。従来の雇用形態や働き方が变革している時代、時には自信を失いかけ、目標を見出せないこともあるだろう。しかし、家庭でも、いいものは残す、変えるべきところは変える、というようにきちんと取捨選択の基準を、しつかり子供達に見せていきたい。

4 親が毅然とした姿勢を見せるとき

◆頼もしい隣人、素敵な子供達

「こらつ！ そんなところを汚よごしたら近所の皆さんに迷惑をかけるじゃないか！」

どこからともなく聞こえてくる、元気なお母さんの子供達を叱しかる声。

私の住む家の近くに元気なお母さんがいる。

彼女は小学校高学年と低学年の男の子を持つ若いお母さん。男の子ばかりを持つたお母さんの宿命か、非常にサバサバした方だが、子供達を叱しかる言葉とは裏腹に、本当に礼儀正しく、心根は天下一品である。

彼女の子供の叱り方は徹底てつていしている。中途半端ではない。

親として子供に言わなければならないことは、遠慮せざしつかり言っている。だから、真っ直ぐなとてもいい子達に育つているのだと思う。決して大人の顔色かおいろを見ながら、大人が喜びそうなことを言う現代風いまの「いい子供」ではなく、従来じゅうらいの子供らしい子供だ。だか

らお母さんが叱ったり、注意したりする声が聞こえてくると、思わず「ごもつとも、ごもつとも。お母さん頑張れ！」と心の中で応援歌^{エール}を送つたものだ。

最近、お母さんの叱ったり注意したりする声とともに、子供達が理屈でお母さんに対抗する声が聞こえてくるようになつた。まさに子供がしつかり成長している証^{あかし}。「頭を使った」対抗^{たいこう}のしかたなのだ。

あの小さな頭で一生懸命考えたのだろう。イッパシの理屈をこねて対抗している声が聞こえてきたとき、思わず笑いがこみあげてきて、今度は彼らにエールを送りたくなつたらいいだ。

そして、子供の挑戦を受けたお母さんも、前以上にさらにしつかりした理屈で、真正面から子供に対抗している。親として言わなければいけないことや、注意しなければいけないことを納得させながら教えている。

「お前達が大人になつて困るからお母さんは言うんだ。親として当たり前。お前達の親なんだから。人に迷惑をかけない人間にならないといけないからだ」と。

私の学校には色々な電話がかかつてくる。その中で一番多いのが、名前も名のらず、血を吸う前の蚊がやつと鳴いているような声で、「あの、すみません。子供が学校に行くのがいやだと言つてふて寝しているんですけど、どうしましようか？」と他人事のように言

うお母さんだ。

◆本当の意味での親業

「失礼ですが、お名前は?」「お子さんは何歳ですか?」という私の質問を無視して、「困っているんです。子供は親の目から見ると、とても優しくていい子供なんですが。どうしたらしいんでしようか?」と一方的に優しい声の主は話し続ける。

「子供に厳しく注意して、もし外で悪いことでもしたら困りますし、どうしましようか?」

話が終わつた頃を見計らつて、「お母さんは、子供さんをどうなさりたいんですか」と質問すると、「せめて高校くらい出ておいて欲しいのですが、いやなんでしょうか?」と反対に私に質問してくる。そして最後に、「あまり子供に言いすぎて子供の心が傷ついたら困ると思って、何も言えないんです。子供に何か言つてもらえるとありがたいんですけど……」

と言う。

私はこの「せめて」「くらい」「して欲しい」というフレーズを聞く度に、二一世紀に生きなければならぬ子供達の親として、「未だにこんなことを言つてはいるけど、この親御さんには世の中の流れが見えないのかしら?」と、何だか淋しくなる。

そしてふつと近所の逞しいお母さんの大声を思い出し、時代がいくら変わろうと、「いい

もの」は絶対「いいもの」であり、「親」は絶対「親」なんだけど。もしアメリカのようないい「お母さんコンテスト」があつたら、私は絶対この元気お母さんを推薦するだろう。

現在は、教育的見地から子供を「馬鹿」^{ばか}呼びわりしたり、叱つたり、叩いたりしたらいけないと言う。でも本当にそうなのだろうか。

今巷^{ちまた}を騒がしている「虐待」^{ぎやくたい}と、親が「躾」^{しつけ}で叩くことは決して同じではない。その区別もつけられない大人達や知識人が多い。

「馬鹿」^{ばか}、まだ分かんないの？ 駄目は駄目。それはお父さんに聞いてみてからでないと駄目なんだつてば」と元気なお母さんの声を聞きながら、本当に素直ないい子供に育つているお子さん達を見るにつけ、「叱つたり注意したりしても、厳しいだけじゃない。しつかりフォローして納得させているしな……」と、本当の意味で親業^{おやぎょう}をしつかりやっている親と、物分かりのいい親を演じてている親の違いを、元気なお母さんから感じてしまう。

近所の元気なお母さんは、子供達と一緒に花を育てたり、猫用の「おしつこよけボトル」を作つたり、夜空の綺麗^{きれい}なときにはお父さんも一緒に、家族中で夜空を見上げて星の話をしたりしている。そして、「おはようございます。ありがとうございます」と近所の草取りを黙々^{もくもく}としている私の母に大きな声で挨拶^{あいさつ}をしてくださる。だから、子供達も同じように大きな声で挨拶しながら、うちの母の横を通り過ぎて行く。

◆親の自立がまず先決

現在ほど、「日本語」が本当に日本人の「共通言語」かな、と心配になるほど、世代間、個人間の意思が通じなくなっている時代はないのではないか。そして、親が子供にこんなに遠慮して生きている時代もないのではないか。子供達に気を遣い、あたかもガラス細工をいじるように取り扱っているのを見ると、子供が本当にかわいそうになる。

気を遣う以前に子供は親が想像している以上に逞しいことを知るべきだ。子供というものは、本来自分で上手く説明できなくとも、何かあつたとき、心から頼れ、心から信頼できる自分の保護者として親がいれば、家庭からまた立ち直るだけの力を手に入れられるものだ。それを自分の顔色を見て恐る恐る恐る気を遣いながら、本心と思えない意見を自分の顔も見ないようにして言うのでは、「親の自立がまず先決」と言いたくなる。

親も教師も、子供を取り巻く大人達も「神様」ではない。間違えることもあるし、失敗することもあるし、誤解することもある。だからと言って、今一生懸命考えて、「正しい」と思える意見を子供にぶつけないということは、人間社会の構成員の一員である子供達に失礼だ。

親も含めて、子供達を取り巻く大人達はいつの時代も子供達の生きたお手本サンプルである。それだけに、一生懸命子供達と付き合うべきだし、子供達の先を生きている者として、間違

えたら勇気を持つて訂正し、謝り、前進していく姿を正々堂々と見せるべきだと思う。たとえ子供達に反抗されても、信じていることはしつかりぶつけていくべきだ。

世の中、表面的な物分かりのいい親を演じたがる親が増え、その被害を子供達が正面から受けてしまっている。でも、真剣に子供の将来を考えるのであれば、自分の信ずる意見ははつきり言うべきだし、時に実行させるべきだ。

物分かりのいい親はなぜ増えてきたのか。子供とぶつかりたくないから、嫌われたくないから？ 私は極端な話、「教師は嫌われてなんぼ」であると思っている。一〇年、二〇年後、あるいは永久に感謝されないかもしれないけれど、それでも正しいと思うことをやるべきだと思ってきた。

「お母さん、ご飯を食べてから水をあげていい？」

「何言ってるの！ 人間がしつかり世話をしてあげないと草花はこの暑さで枯かれてしまうんだからね。お前は足があるから自分で水を飲みに行けるけど、お花はそうはいかないんだよ。自分の食べる前にやりな。涼すずいうちでないとお水はやつてはいけないよ、わかつた？」

今日も朝から、元気なお母さんの声が聞こえてきた。その元気なお母さんの声になんとかほつとして、「今日も一日頑張って仕事しなきゃ」と思わず呟いていた。

5 親の願望を子供に背負わせていませんか？

◆エリートって？

「先生！ 日曜日、パパとママと動物園に行ってきたんだよ」

満面に楽しかった日曜日の余韻を残した笑顔と、ポンポン弾んだ声が、机に乗せられた彼女の日記と一緒に、私の心を幸せな気持ちにしてくれた。

あれから二〇年以上の歳月が過ぎた。

両親共に博士のタイトルを持つ彼女の親は、当然のようにそれに相応しい学校での評価を彼女に期待し、それに答えようと彼女も随分苦労していた。そしてその努力が現実に追いついていけなくなると、どうにもならずカンニングをした。

その都度、「カンニングしなくていいのよ。テストはあなたのためにあるのではなく、先生のためにあるのだから。先生が生徒にどれだけ上手に教えられたかを知るためのものだから、もし悪い点数をとつても、それはあなたが悪いんじゃなくて、上田先生が悪いの。

教え方が悪かつたのだから、先生もう一度、どうやつたら皆が理解できるか、一生懸命考え方を考えてみるからね」と言つた。

「お猿さんがニコニコしていたの？ よかつたね」

私の両手を取つて覗き込んだ彼女の目のあまりの愛らしさに、思わずしつかり抱きしめたくなつた。あの可愛かつた子も、もう二〇歳近くなる。

親の期待に添えなかつた彼女は、母親が世間體を取り繕つている中、今でも遠回りしながら生きているという。そして、そんな彼女を父親は自分の世界には存在しなかつたかのように振る舞つているという。

高学歴とは何なのか。エリートとは何なのか。

大学の数も少なく、「先生」と呼ばれる人達からしか知識が入手できなかつた時代、高学歴者は大変貴重きらょうだった。だから高学歴で知識のある人は教えを乞われた。その代価だいかに見合つた生活が保証され、「エリート」と呼ばれ尊敬あたいされていた。また、事実、尊敬されるに値する知識を携えていたので、「さすが、学士様は違う」と感心されていたのを記憶している。エリートにはなれなかつた親達や偶然エリートになつた親達が、自分の子供や孫に対し、高学歴者になつて欲しいと夢を持つようになつた。「天然エリート」ではなく、「養殖エリ

ート」を育て始めた。

その需要に応え、「塾」という名前の「養殖エリート養成所」が沢山でき、養殖エリートが乱造されるようになつた。愚かな知恵により、知識という粉を薄くふりかけた、一見エリート風の似非エリートができ上がつた。知識を知恵に変えられず、消化できない知識につぶされている似非エリート達。人間としての一番大切な心や、その心を育てる場であるはずの家庭までが、安らぎからはほど遠い場所になつてしまつた。

◆「動物園に行きました。お猿さんが、ニコニコ笑っていました」

子供の塾通いやお稽古事、学校のブランド名や成績のことの一喜一憂せず、風が運んでくる花の香りを楽しんだり、時間も忘れて声を嗄らして友達と遊びまわる。子供らしい心で何ごとも興味を持ち、それに一生懸命ぶつかっていくような子供。勉強はいまいちだけど、子供の心が年齢とともに豊かになり、家庭に笑い声が絶えない。そういうことに感謝しながら過ごしている親が、現在どのくらい存在しているのだろうか。

エリートにならなかつた子供を拒否し、存在しなかつたように振る舞う親。「国立大学以外は大学じゃない」と言いきる親。家庭の中を流れていく冷たい川。その川を長い間漂い、社会人になつても冷たい川の中から這い出せない子供。

こういった状況を見ると、いったい親子の関係とは？　人の幸福とは？　生きる価値とは？　そんなことを考えさせられる。

たつた一回しかない人生の親子という関係を、淋しく冷たい関係にしてしまつている原因に気付けないのだろうか。両親と一緒に大好きな動物園を訪れ、うれしい気持ちを「お猿さんが、ニコニコ笑っていました」と表現していたあの可愛い子供の心。それを三〇歳近くなつた今でも曇らせ、苦しませ続けている「学歴至上主義」の親達。そんな親達にこう言いたい。

「あなたが頑なに信じてきた固定観念こていかんねんによつて、あなたの子供の顔が曇つてゐることに気付きませんか。あなたの考え方が狭かつたと気付き、考え方をちょっとえてみる勇気を持てば、あなたにとつて一番大切な子供が救われると気付いて下さい。あなたの子供は、あなたから生まれましたが、あなたではありません。思い通りにならなくとも、子供はやがて大きくなり自分で道を切り開くのです」

私は彼女の家族ではない。一人の教育者でしかなく、彼女の人生に関わるには限界がある。しかし、これ以上このようないい親子関係を築かないために、ちょっとご自身の家族関係を振り返つてみていただきたい。あなたより何十年も長く生きなければならぬ大切な子供達のために。

6 子供の成長を見守つて

◆日本人とイスラム人のハーフ少年との出会い

「久しぶりに家族と一緒に日本へ行きます。是非先生と会いたいので、先生、ご連絡を下さい。ハンスより」

こんなFAXがイスラムから飛び込んできた。

「ハンスが来る！ハンスが来る！」とうれしさのあまり、そのFAXを手に思わず叫んでしまった。

私は教師になつて二十年以上経つ。その間、いつも自分に言い聞かせていることがある。

それは、

- ①生徒の未来の可能性を自分基準の短い物差しでは絶対計らないこと（決めつけないこと）
- ②生徒とは、年齢・性別・貧富の差・勉強ができる、できないに関係なく、平等につきあうこと

③どんな状況においても、上田先生はいつも上田早苗らしくあること

④生徒との出会いは、長い人生のほんの一瞬の出来事であるかもしれないが、この一瞬が彼等の人生の基礎になるのだから、何時も真摯な態度で、できる限り工夫した授業をしその場限りの手抜き授業はしないこと

⑤生徒が自分で楽しんで勉強を始めたら、教師の仕事の七〇%は終了。残りの三〇%で生徒達と一緒にいられることに感謝しつつ、一日も早く、先生が一〇〇%不要になるようにな導いていく。ゆめゆめ「彼は私の教え子です」と言って、彼らにつきまとうようなことはしないこと、などだ。

こんなことを常に自分に言い聞かせ、心がけている。しかし、何時も心にかかっている例外が二人いる。彼はこのうちの一人だ。「元気でやっているだろうか」と彼をいつも心のどこかで心配し、彼に関する情報が入ると、一生懸命それに耳を傾けた。

父親が日本人で母親がスイス人というダブルカルチャーの彼とは、スイスの日本人学校で出会つた。しかも私が最初に教えた小学校一年クラスの「問題児」として。

父親は大学の助教授。両親の仲もあまりよくないようであった。その上、日本語もドイツ語も中途半端で、イスの学校にも日本人学校にも馴染むことができず、その鬱憤をはらすかのように悪さをしていた。その悪戯のひどさと日本語力の問題で、他の生徒の足を

引っ張るという危惧から、二年生には進級させるが、日本人の誰かにプライベートレッスンをしてもらい、クラスについていかせるようにしようという案が、校長先生から出された。そして色々な条件を考慮した結果、プライベートレッスンの適任者に私が指名された。

それから二年半、週一回日本人学校に行く前、私の家か彼の家で勉強し、それが終わってから一緒に日本人学校に通う生活が始まった。

彼の上には異夫兄があり、ちょうど反抗期の一四歳位だった。兄弟仲は普通であったが、日本人の私を見るときの兄の目は冷たく、その冷たさが当時の彼の淋しさを表しているようであった。またその冷たい目が、半分日本人である弟の言動にも関係しているように思えた。私はできるかぎり一四歳の兄と話すチャンスを見つけ、拙いドイツ語で一生懸命会話をした。

◆プライベートレッスン

そんなチャンスが何回か訪れた後、目が合うと一四歳のお兄さんの顔に時々笑みがこぼれるようになつた。それにつれて弟の反抗的な態度も少しずつ和らいでゆき、一緒に通う市電の中で、お年寄りに黙つて席をゆずつたり、困っている人に手を差し伸べたりと、これこそ彼の本来の姿のだというような微笑ましい出来事を、垣間見ることも多くなつた。

父親は口下手へただが心根こころねの優しい方で、日本人留学生の心の支えになつていてことや、イス人の母親も、色々な日本人のために骨を折ることをまつたくいとわないし、とても善良な方だということも、その頃に分つてきた。しかし、幼い彼にはそれが理解できずについた。

彼は自分が日本人だかスイス人だか分からぬアイデンティティの不安を抱えていた。また、彼が言葉の問題から起る学業不振と、その心の悩みが誰にも理解されないことの寂しさがあり、自分の居場所を探して喘あえいでいることも分かつてきた。

私はプライベートレッスンの内容を百八〇度方向転換させた。

レッスン中、私は折にふれ、彼の父親と母親が立派な人物であることを伝えるようにした。「お父さんは日本で一番いいと言われる大学の先生をされているんだよ」「お母さんは日本人留学生に心から慕したっているのよ」。こうした話を取り入れていった。

そして、彼も御両親のよいところを全部引き継いでいて、心根は他の人の何十倍も優しいと思えることや、私も一生懸命勉強してドイツ語の学校に行くのに、上手にドイツ語が話せず、ドイツ人の先生に馬鹿にされ、悔しくてトイレで何度も泣いたことなどを話して聞かせた。

また勉強ができるのも素晴らしいが、人間が優しいことの方があつと大切だと思う私の

意見も、例をあげ話して聞かせた。しかし、これは納得できないと思う卑怯な振る舞いと、嘘をつくことに関しては常に厳しく諭し、それでも分からぬ時は、心を鬼にして叩いた。いつからか、「先生、今日お仕事がないの？　じゃ、もつとここに居てもいい？」と私の仕事のないときは、家の片づけを手伝い、私の側の椅子や台所の椅子に座つて、イスの学校の話や、友達や家族のことを話してくれるようになつていった。そして、すでに日本に帰国していた父親から送られてくる「中学校の科学」という雑誌を持参して質問し、科学音痴の私を悩ませた反面、彼の頭の良さに「すごい、すごい！」と感嘆せずにいられなかつた。

◆教え子との再会

「先生、ロスは暖かくていいですね」と、清々しい若者になつて、私の転勤地であるロスアンゼルスに訪ねてくれたのは、彼が一八歳になつたときだつた。

「イタリア美術が好きなので、バチカンの衛兵になつてイタリアに住むか、郵便屋さんになろうかと考えています」

「郵便屋さん？」

「そう、郵便屋さん」

こんな話を交わしながら、彼の母親の友人が住む隣街となりまちに向かつて車を走らせている私の横で、方向音痴の私を気遣つてナビゲートしてくれる彼の横顔に、過ぎていく時間の早さを改めて感じていた。

彼はその後、専門学校を卒業し、機械の製図を引く仕事を始めたことや、両親が離婚したこと、かつては反抗期だったお兄さんが結婚したことなどが噂話うわさばなしで伝わってきていた。そして、久しぶりにスイスに行つた際、彼の母親から、「私を非難ひなんして家に寄りつかなくなつたのよ。先生、息子に会つて下さい」と、彼の新しい連絡場所れんらくじょうしょが知らされた。

「先生、僕、二十九歳になりました」

電話の向こうで、明るい声が返ってきた。コンピュータの仕事を辞め、福祉の勉強のため再度学校に通つているという彼に、「あなたは本当に優しいよい子だつたもの、福祉の仕事はあなたに一番合うと思うわ。先生、転職大賛成よ」と、ほつと胸をなでおろしながら言つたことを覚えている。

あんなに小さかつた彼が二十九歳になつたことに、驚きと感嘆かんたんと何とも説明できないうれしさで、「今度来るときは、絶対会おうね」と約束して電話をきつた。それから一年後、「エイズで末期になつた若者達の面倒を、寝食しんしょくを共にしながらお世話をするという組織で働いています」と、一八歳の時よりもっと素敵な男性になつて自宅を訪ねてくれた。

◆自立と子離れ

「今、僕はスイスの有名な時計屋で仕事をしています。そこに先生の知り合いの方もいて、先生のことがよく話題に出来ます。先生に会いたいです」と、三四歳になつた彼はFAXの中で、また転職をしたことを告げている。「仕事の内容は結構厳しいです。でも、人に頼られて、人のために生きることは、とても自分に合つてゐると思います」と言つていたのに、彼に何が起きたのかと、ドイツ語で書かれた手紙を読み続けた。

「最後に先生とお会いしてから五年経ちました。その間、僕は結婚しました」

「驚いた！ 彼は結婚したんだ」と思つた瞬間、「ウワーー！」とうれしさのあまり大声をあげたくなつた。彼の味方になり、彼を支えてくれる人ができた。名前からするとスイス人だろう。どんかは分からなければ、私は彼女に会つたら、ただ「ダンケ！ ダンケ！」とだけ連呼することだろう。どんな仕事をしようと、どんな生き方をしようと構わない。今の彼には、彼を必要とし、彼を支えてくれる家庭がいる。「今どき、こんな好青年がいるの」と私に言わしめた彼だが、フトしたときに見せていた淋しそうな表情がいつも心の底にひつかかっていた。もうそんな表情も遠のいていくことだろう。

「Bald werden meine Familie und ich wieder einmal Japan besuchen」

「」の meine Familie は、彼の母親と弟かと思つたが、もしかして奥さんと子供かもしけ

ない。子供だつたらどんな子供なのか。彼の小さい時に似ているのだろうか。あと一週間で会える彼と彼の家族。一番うれしいと思えるクリスマスプレゼントは過去に沢山たくさんあつたが、こんなにうれしいクリスマスプレゼント、本当にありがとう！

「三四歳になつた彼はどんなになつたのだろうか。家族と一緒にときはどんな幸せそな顔をするのだろうか。日本語、忘れちゃつたかな。彼の奥さんとドイツ語で話さないといけないかな。ドイツ語、思い出すかな」と、会えるうれしさとどうでもいい心配を抱え、彼の到着を首を長くして待つてゐる。彼にもいろんな糺余曲折うよきよくせつがあつたわけだが、今ではこうやつて自立していることが何よりの喜びだ。

「子供の自立」とは親からみれば、ともすればずっと手許てもとに置いておきたいという願望と対立するものだ。その気持ちは分からぬものではない。しかし、しつかり社会で生き抜いていける力を持つた骨太な子供に育てたいなら、途中から支えを取り外してもしつかり上を向いて伸びていける木のように、そうやつて子供が育つように、じつと手を出さずに見守ることも大事ではないだろうか。

7 子供の心の健康を見る

み

◆心のもつれを解きほぐす

六年間の不登校経由で学園に入学。自分の夢を実現するため国立大学を目指し、春から予備校に通うことを決めた「不登校の先輩」と一緒に、東北の小さな町から可愛いお客様が学園にやって来た。

デリケートな感じはするが、とても賢そうな小学校四年生の男の子は、東京に住む彼の叔母様に連れられて恐る恐る上田学園にやって来た。こんな小さな頭で、こんな小さな身体で、何に悩み、何に心を痛めているのかと、彼の表情を見ながら、私の方が泣きたくなつた。

「今の学校には戻りたくない！」

「どうして？」

「疲れたの。先生が僕のことを朝礼のとき足で蹴飛ばしたし……」

「勉強は好き?」

「嫌い!」

「何が嫌い?」

「国語。漢字が嫌い!」

「好きなものは?」

「体育と算数」

可愛いお客様は出されたオレンジジュースに手もつけず、緊張した面持ちで私達の前に座っている。

親一人子一人の彼は、母親が仕事で忙しいときは、一人で留守番をし、放課後は週二回スポーツ少年団に行き、週二回塾通いをしているのだという。

「体育が好きなら、スポーツ少年団も楽しいでしょう?」

「いや、疲れた」

何もかも疲れたので、東京の学校に転校したいと言う。東京は従兄弟達もいて楽しいし、お母さんも東京に行けばいいと言う。話し合いの途中からハンカチを目にあてて、涙を拭ふきながら訴え始めた。そんな彼を見ながら、彼が自分でも理解できない彼の本心に気が付いてくれたらいい、今の自分の心から逃げたら本当の不登校になってしまふし、何の問題

解決にもならない。そういうことを理解して欲しいと願いながら、自分の心のうちを説明できず、混乱し、糸がこんがらがるようになつていて彼の心のうちを一つひとつ、解きほぐしていった。

「君が『学校にもう行きません』と先生に自分で言つたの？」

「違う、お母さんが言いに行つたの」

「先生は悲しんだでしよう？　君が学校に来ないと言つたので」

「分からぬ」

「お母さんは、先生が何とおっしゃつたと言つてらした？」

「早く、学校に戻つて来てください、って」

「ほら、先生は君が学校に来ないこと悲しんでいると思うよ」

「違う。先生は僕を蹴飛ばしたし……」

「なぜ、蹴飛ばされたの？　朝礼か何かで列を作つているとき？」

「そう」

「そのとき、先生に『蹴飛ばさないで下さい』って言つた？」

「言わなかつた。怖いから」

「きっと、先生は君がこんなに傷ついているつて知らないと思うよ。怖くとも上田先生だ

つたら言うと思うな……。どうして人間に口があるか知ってる？」

口の役目は何か、そして自分の気持ちを口で伝えなければ先生もお母さんも、彼の気持ちが理解できず悩んでいると思うよ、と話して聞かせた。

そして、いつもいつも「良い子供」を演じなくていいこと。嫌なことはしつかり人に伝える努力をすること。解決する方法の一つに転校もあるが、それは色々努力して駄目などきに選択すればいいということ。漫画を読むことも、ゲームをすることも国語の勉強になること。勉強は何時間もすると頭が痛くなるように、国語の勉強の一つの漫画やゲームも、あまり一杯^{いっぽい}やると良くないから長くはやらないようにしようね、と話しあつた。すると、彼の口から今まで自分で気付いていなかつた本心が出てきた。

「僕、おうちに帰って学校に行く！」

◆忙しくても子供と触れ合う機会をつくる

彼の目には仕事で忙しそうにしているお母さんの姿しか映らなかつたのだと思う。そして無意識のうちに「お母さんに心配かけては駄目！」と頑張つてしまつた。そんな彼の心に隙間風^{すきまかぜ}が吹いてしまつた。心中では「自分を見て」と叫んでいるのに、それをうまく伝えられないことで、普段だつたら何とも思わないような出来事にも傷ついてしまつた。

不登校のきっかけは、意外とこんなことから始まる場合もある。

今回の話し合いで、彼がすぐ元気になるかは分からない。けれど、彼の苦手な漢字の勉強について、「漢字の勉強は楽しいのよ。それに簡単なんだから。今度東京に来たら教えてあげるから、学園に遊びに来てね」と申し出ると、ニコニコしながら、春休みにまた東京に遊びに来たときは、従兄弟と一人で学園に勉強道具を持つて来てくれるることを約束してくれた。その帰りには、井の頭公園のサル山見学に行くことも約束。

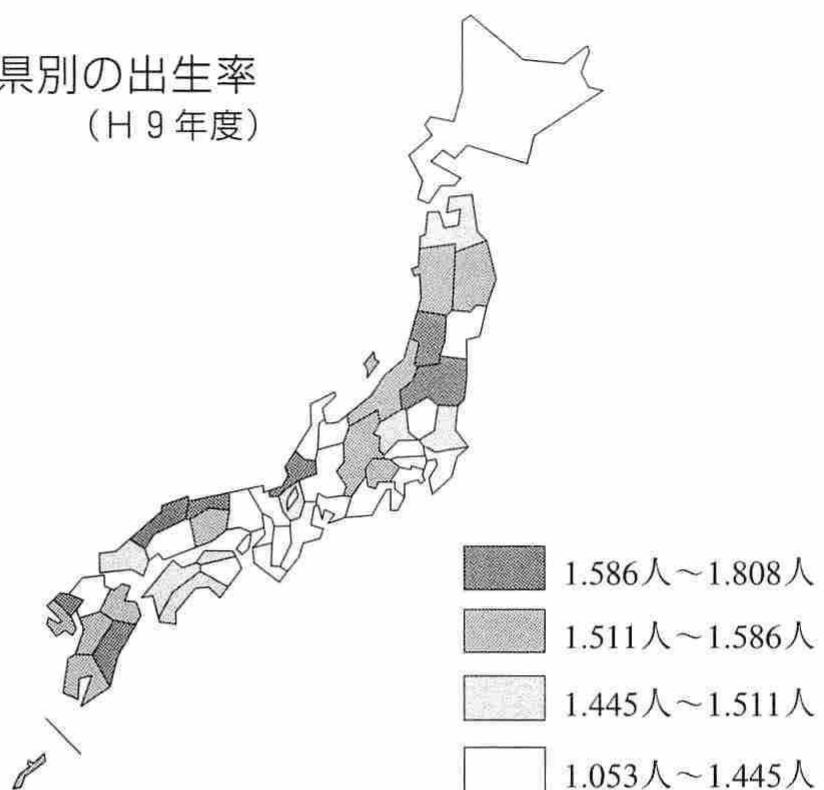
ホッとした顔をして帰る彼を見送りながら、教師としても、子供を取り巻く大人の一人としても、意味のない暗い顔を子供達にさせてはいけないとつくづく反省させられた。

まずは子供を取り巻く親や、大人がふつと立ち止まって、ゆっくり深呼吸をしよう。そして、子供達には一杯、一杯愛情を与えて欲しい。その愛情とはお金でも時間の長さでもない。子供達と心を通わせる笑顔やスキンシップのはずだ。

「仕事で忙しくても、お母さん、帰ってきたときには一瞬でいいから子供が嫌がるほど、ギュッと抱きしめてあげて下さいね！」

「東北の小さな町から來た可愛い不登校児君！ 学園に来てくれてありがとう。一緒に頑張ろうね。私の仕事とはいえ、彼と話し合いのチャンスを下さった彼の東京の叔母様、ありがとうございました！」 そう言わずにいられなかつた。

◎都道府県別の出生率
(H 9年度)



時間がないから、仕事が忙しいからといって家庭や子供を**顾みない**社会を大人は変えていこう。デンマークの出生率上昇の背景には育児休暇の整備がある。また、ノルウェーでは父親の育児休暇が義務づけられている。これは「愛情ある強制」と考えられていて、そのように制度化しないと父親は育児休暇を取らないからだという。

地域コミュニティ、社会全体が本当の意味で子供を育てやすい環境に整えていくこと。これから大人がもっと気付き、変えていかなければいけない問題だ。

少子化が進む日本だが、子供を生み、育てることに希望や魅力やメリットを感じられる世の中にしていくのも大人に課せられた役目だろう。

8 親子ごっこはやめにして

◆物分かりのいい親を持つて幸せ？

地震、雷、火事、親父！

日常、怖いと恐れられているものを順に列挙した言葉だ。地震より、雷。雷より火事。火事より親父と恐れられたのは昔の話。今は、地震が一番怖いものになり、親父はどこかに消えてしまった。

確かに昔の親父は煩しくて怖い存在であったが、しつかり家族を守っている感じがあつた。今は優しくて、物分かりのいい親は存在するが、本当に何かがあつたとき「お父さん、助けて」と言えなくなり、むしろ「お母さん、どうにかしてよ」とふて腐れる子供に対して、毅然とした姿勢を示せない親が増えてきた。

最近、中学一年のときから不登校を始め、現在中学三年生になつた子供の相談にのつた。彼女はなかなかしつかりした感じの、いわゆる「いい子」と言われる部類に入りそうな

子供である。でも、友達とは上手くいかなくて、ずっと学校に行つていなといふ。

「本人の意見を尊重して、何も言わずに暖かく見守りたいと思ひます」とおっしゃるご両親。彼女の不登校という現実を知らされていなければ、傍目から見ると物分かりの良いご両親と、言葉遣いの丁寧な子供が構成している誠に理想的な家族のように見えてくる。

でも彼女から丁寧な言葉遣いで話されれば話されるほど、物分かりのいいご意見をご両親から伺えれば伺うほど、何か心にしつくりするものがなくて、居心地が悪い。その居心地の悪さに「どうしてかな?」と考えずにはいられなかつた。そしてふつと、「物分かりの良い親を持つて、子供は本当に幸せなのかな?」と考えてしまつた。

◆優しさで現実世界を遮断する

最近、巷では「癒し系言葉」が氾濫している。その癒し系の言葉の中に「物分りのいい親」という何とも微笑ましい言葉があり、その言葉を皆で楽しんでいるように思ひるのは、私だけだろうか。ちょっと前までは父親が頑固か母親が厳しいか、少なくともどちらかが厳しい親の役割を引き受けていたように思ひう。両親が物分りがいいことはあまりなかつたよう記憶しているのだが。

「私は友達のためを思つて色々してあげるのですが、友達は何もしてくれないんです。何

かをするのはいつも私で、友達ではないのです。それを指摘すると、『何も頼んだおぼえがないのに』と言われてしまうのです』

そう穏やかに話す彼女に対し物分かりのいい親は、「いい友達をつくらせたいと考えて、私立の良い学校に行かせたのですが、裏切られたような気がして……」と言う。そして、「今の学校も、友達も本当にダメですね」と。

それをじっと聞いていた子供は、「家は両親が私のことを理解してくれるので、ラッキーだと思います」とニコニコ話を続ける。物分りの悪い私は、「世の中、あなたを中心に世界が動いていたらしいのにね」と言いたくなつた。

◆頑固な親の復活を

「物分かりがいい」というのは、どういう意味なのだろうか。本当に物事を刀で真二つに切るように理解しているのだろうか。どこかで、「いや、どこかちょっと違うかな?」と感じとはいいないのだろうか。他人の意見や立場などを理解するには、それを判断する明確な意見が自分の中にはないとできないはずだ。

他人と上手く付き合えないことを、全部人のせいにして、学校に行かないことを正当化することに一生懸命な子供に対し、何も言わない両親。私はどうしても「物分りのいい

「親子ごっこ」をしているようにしか思えない。「ごっこ」は今までたっても「ごっこ」でしかないのに。

私の後ろで本を読んでいた「学園の主」のような学生が言う。

「先生、他のフリースクールに行っている知り合いが言っていたんですが、最近のフリー・スクールの生徒の間で、どんな精神安定剤を飲んでいるのかを自慢しあうのが、流行つているそうですよ。変な奴らですよね」

それを聞いて思わず、「もしかしたら『物分りのいい親』も流行なのかしら?」と呟いてしまった。

地震、雷、火事、親父。

本当に懐かしい言葉である。懐かしい言葉ではあるが、頑固で頼れる父親と厳しいけれど優しいお母さんが復活して欲しい気はするのは、私だけだろうか。本当に私だけだろうか。

9 親が子供に対し適切な距離をとる

◆友達のように話せる親?

「我が家は親子が大変仲良くて、友達のような関係なんですね」

現代は何でも友人のように親しくなることをベストと思つてている人が多い。

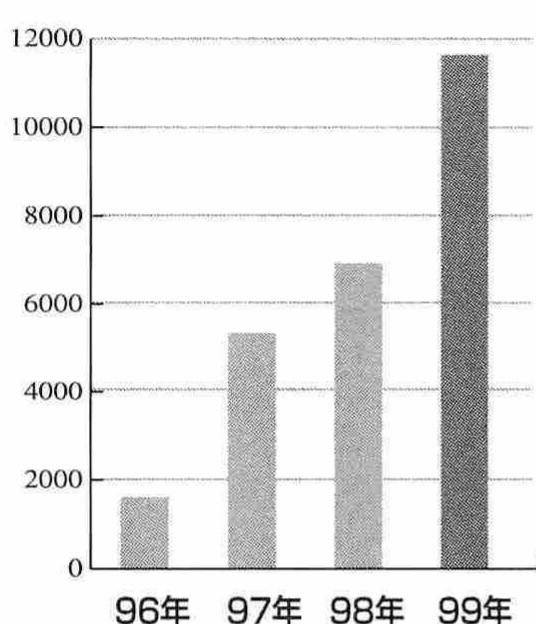
例えば、「学校の問題は先生と生徒の間に信頼関係がないから起きるのだから、『先生!』という呼び方を廃止して、生徒も先生も『山田さん』『田中さん』と呼びあって上下関係をなくしたらしい」と真顔で言う人がいる。

本当にそうだろうか。なんで家族・学校・会社の中で、「親しい」関係を表現するのに、この「友達」という言葉を使うのだろうか。これはひょっとして、「友達関係」イコール「平等」という発想から来ているのだろうか。

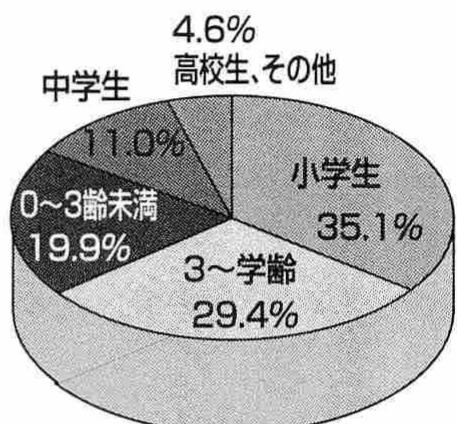
近頃問題になつてているDV (domestic violence・家庭内での暴力)、子供の虐待、不登校生徒の増加、援助交際、学級崩壊など、子供のかかわっている社会問題を考えるとき、親

◎児童虐待(チャイルド・アビューズ)に関する調査

児童虐待相談処理件数の推移



被虐待児童の年齢階層別の割合



出所) 厚生労働省報告例

と子、先生と生徒、社会と子供、子供と子供の関係が「同等」であれば解決できると考えるのは早計すぎるだろう。

「受験、受験で、嫌がる本人を無視して親の考えを押し付けてしまった結果、こうなってしまったのですから、何でも言うことを聞いてあげようと思います」と言つて、

一五歳の娘が援助交際をしても、学校をサボって遊び歩いても、どこかに泊まり歩いて帰つてこなくとも、全く叱らないという親。「子供とは、友達のように何でも話せる親になりたいんです」と他人事のように淡々と子供の話をする感情のない親御さんの顔に、なんとも説明できない淋しそうな表情がフット横切る。聞いている私の心にも説明できない侘しさが残る。

④章 背筋をピンと伸ばした親になる

子供に対する愛情の種類はたくさんあるだろう。しかし、何年も何年も子供に振り回された両親の「心の愛」。それを支える力が消えかかり、頭で考える「理性という愛」だけが、何とか両親の中で支えられているような印象を受けた。

◆子供達は大人に本気で間違いを諫めいさてほしい

子供達にかかわる問題を考えるとき、「どうして?」という言葉が思わず口をついて出てしまう。どうしてこんな問題が起こるのだろうかという思いと、自分達の過去の経験の中に存在しえなかつた新しい問題、判断基準、価値基準に早く「答え」を見出したいという「焦りあせ」の気持ちが心を重たくする。

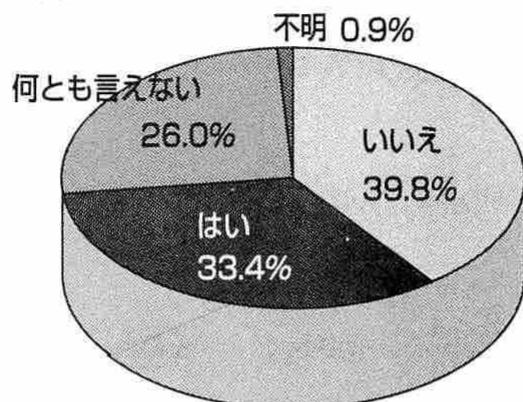
そして親も先生も、子供達を取り巻く大人達のほとんどが、答えの見出せない教育問題に自信をなくしかけている。「大人達が悪いからだ」と極端に自分達を責め、子供達のすべてを受け入れてあげようとする。しかし、大人達のこうした態度は、これ以上考えることを拒否し、思考を停止させているに過ぎない。だから子供達に対し全面降伏する。子供の言いなりになることで、子供と大人の関係を回復させ、いい関係を築けると信じて努力する大人が現れる。

しかし本当にこれでいいのだろうかと疑問に思う。「子供達をそのまま受け入れてあげる」

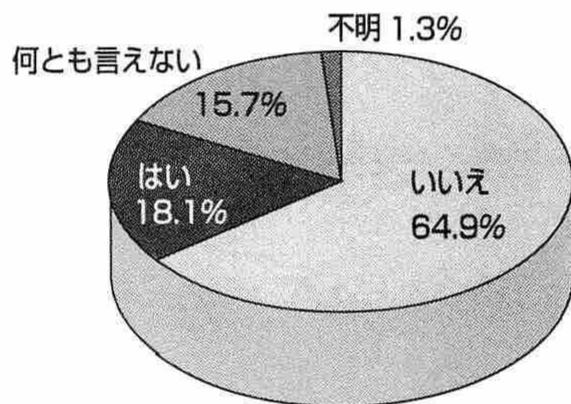
◎母親の心身の状態と育児への影響

幼児健康度調査（平成12年度 日本小児保健協会）より

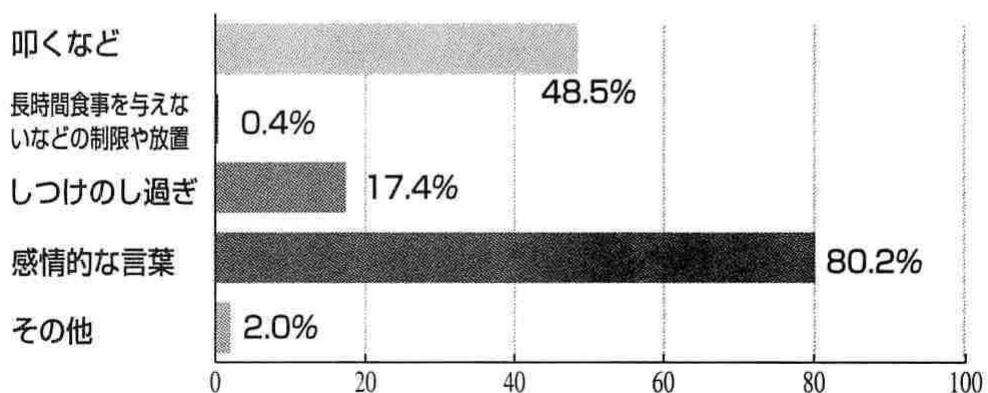
1、子育てに困難を感じることがありますか？



2、子供を虐待していると思ったことはありますか？



3、思っていると答えた者のうち、虐待していると思う行為は？



□ 章 背筋をピンと伸ばした親になる

「受けとめてあげる」という言葉は口当たりがいいため、そういう言葉を発すれば、それだけで子供達を理解し、問題を抱えた子供も導けると思われがちだ。

しかし、自分の心を押し殺し、子供達に注意も敬意もまったく払わざやつと成り立つている「受け入れ」や「受けとめ」の関係なら、彼らの言葉でいうところの「しかと」、すなわち、存在を無視、疎外^{そがい}したことになると思うのだが……。

子供達の大多数は本当は分かつているのだ、自分達が何をしているのか。

例えば、「援助交際^{はいじゅう}という名の売春^{ばいしゅん}」「自由^{とうひ}と言う名の逃避^{とうひ}」「権利^{けんり}と言う名のわがまま」。ただ自分のことを正しく理解してもらいたいだけなのに、自分をうまく説明できないことのもどかしさ。決して「正しい！」とは思っていないことをしてしまう自分の愚かさ。それを止められない自分。親としての自分の考え方や意見を持たず、常に「世間^{おろ}」というメガネをかけた目でしか自分達を見ようとしない親達への不満。坂道を転がっていくように感じる不安な自分の毎日。

彼らは心のどこかで、本気で自分を叱って欲しいと考え、本気で甘えさせて欲しいと望み、本気で自分のことに目を向けて欲しいと願っているのではないだろうか。一生懸命シグナルを出せば出すほど、自分達の思いとは逆方向に遠ざかっていく親達。しまいには「お客様」が来たような気の遣い方で自分達に接してくる。それではまるで、「あなたは家

の者ではありません！」と控えめに言つてゐるようなものだ。

一番味方になつて欲しい親や家族から理解してもらえない自分を「認めてもらいたい」一心で、同じような思いで孤立してゐる人達を「仲間」と位置付ける。その仲間に入ることで自分の不安な気持ちや不満を、「自分だけがやつてゐるわけじゃない。皆だつてやつてゐる」という理屈で慰める。自分の心を偽り、正当化することで、今にもつぶれそうな不安と自分のプライドを保つてゐる。

◆同等にはなりえない上下関係

「自由」という名のもとに「なんでもあり」を謳歌する現代は、あらゆることが複雑になり、簡単に未来が予測できなくなつてゐる。こんな時代だからこそ、表面的な「美しい言葉」や、一見「知識人」ぶつた言葉に惑わされではならない。言葉遊びや言説に心を振り回されてはいけない。子供達を本当に愛しているなら、悪いものは「悪い」、危ないものは「危ない」と、シンプルにはつきり言うしかない。

絶対叱つたり注意したりしなければいけない場面でも、「我が家は、何でも話し合いによつて決定する友達家族なんです」と答える。現在進行してゐる正しいと思えないことに対しても、自分達を誤魔化し目をつむつてしまふのは、絶対間違つてゐる。それでは子供達

に「愛情がない！」と思われても仕方がない。

人はいつも時間という大きい流れの中で生かされている。「先に生まれて先に死んでいく」「後に生まれて後に死んでいく」人間の攝理^{せつり}。先にこの世に存在した者は後から存在する者に対して、人間としてどうやつて人と関わり合わなければいけないのかを大人から子供へ伝えていく役目がある。

だから、親と子はあくまでも親と子であり、先生と生徒はどんな呼び名になつても、先生と生徒。上司と部下はどんな時でも上司と部下という関係は変わらない。「同等」には絶対なりえない。

そしてこの同等になりえない関係が、礼儀^{れいぎ}に支えられた「上下関係」だ。この上下関係は同等と分類されている友人関係の中にも、自分の知らないものを教えてもらつたり、助けてもらつたり、という形で実はいたるところに存在している。

◆親と子に必要な距離感覚

言いたいことを言う裏には、きちんとした礼儀に支えられた言い方があるように、この礼儀の根本は「上下関係」にある。どんなに時代が変わっても親は親。大切な場面では親は子供に対しきつちり距離を置くべきだろう。

教師も同じだ。生徒の同級生のように振る舞うのなら存在している意味はない。

この上下関係の距離のとり方次第で、人間関係はスムーズにも、でこぼこにもなる。そしてこの上下関係の距離のとり方は、相手に対する尊敬や謙虚さに裏打ちされた礼によるのだろう。そしてこの礼は、その出発において学校でも社会でもない、他ならぬ家庭からしか学ぶことができない。

こういったあらゆる礼の核は、擬似的にせよ「家庭で営まれる愛」から発している。しかし親が子供へ依存することなどによつて、この愛がいびつになつたり、崩れたりしてしまふと、それがいじめ、虐待ぎやくたい、犯罪に発展する要因になりかねない。

だからこそ「親しき仲（身内）にも礼儀（距離は）あり」という関係をしつかり築いておこう。複雑な社会、理解の範囲を超えそうな人間関係。そんな時代だけに、人間として生きるための原点に戻つて、「礼」に支えられた人間関係をつくろう。相手の領域りょういきをきちんと認めるとき、大切な場面で相手と自分にきちんと距離の置ける関係を。

二児の母から上田先生への手紙 1

私は33歳2女児の母です。以前に『J MM vol.9 教育問題の新しい問題2』で村上龍さんの上田学園のフリースクール取材記事を読み、読者レポートとして、上田学園についての寄稿をさせていただきました。その時は上田学園の取材記事から、「この学園で行われていることが効果的なのは、魅力的な生き様を見せる大人たちから、何らかのパワーを子供達が得、頑なな心が自浄作用のように少しづつ和らぎ、心が前向きになっていくからだろうということ。また、世の中は広く、様々な価値観があることを知り、いろんな面から物事を見、対処できるようになる、あるいはなろうとするから……」等を、自分の教育実習体験などと合わせて、書かせていただきました。

今回先生が本をお書きになるということで、先生にお手紙を出させていただく機会を頂きました。一人の母親として、日常の育児のなかで本当は不安に思っていることや、これから迎える子供との学校生活への不安や疑問、先生のお話の中で気がついたことなどについて質問させてください。

「地域コミュニティ、社会全体が本当の意味で子供を育てやすい環境を整えていかなければならぬ。そうしなければ日本は子供を産み、育てるに希望も魅力もメリットも感じられない国になってしまう」とありますが、具体的にどういう環境作りが必要だとお考えですか？

当学園の方針についてとてもよくご理解いただきありがとうございます。

子育ての喜びとは、教師と似ていて、子供を産み、親になり育てる中で、子供が成長し一人前になっていく様子を「見られる喜び」につきると思います。そのための子供にとっての環境作りとは、まず親自身にあります。まず、親が子供に対し「あなたが私の子供でうれしい。あなたを育てられてとてもうれしい！ 感謝している」と全身で意思表示することだと思います。そのことがまず最初にお母さん方へ伝えたい私からのメッセージです。 それと同時に、昔のような隣近所のコミュニティーの充実が必要だと思います。おせっかいをしてくれるおばさんやおじさん達や、一緒に遊んでくれる子供達同士の集団がいることだと思います。今は昔と違い、気軽な隣近所との交流が少ないので、それと同じ機能を果たす場所作りが大事です。子供達同士で遊ぶ「原っぱ」であったり、おじいさん、おばあさんが集まってきておしゃべりする場所。今そういう場所がないから、と諦めないで、それに代わる空間を現代風にアレンジして、工夫して作りだしてください。いろんな世代が交流し、そこに若いお母さん達も気軽にかけて、そこでの交流から子育ての知恵や生活する知恵を学んでいけるような場所を。実際、自分達で地域親の会を発足し、生産的な活動をされているところも数多く出てきています。

ぜひ今度、お子さんを連れてうちの学園に一度遊びにお越しにななりませんか。